

自 平成二十五年九月六日
至 平成二十五年十二月八日

夕ざりの茶

展示目録

寄付

掛物

其角筆 短冊

薄雪や大の字枯る、山の草

香合

交趾 台牛 天の字アリ

神戸家伝来

汲出盆

時代栗木地毘

汲出碗

釉裏紅

苩盆

一閑作 手付丸

火入

繪唐津 四方

手焙

松竹文色漆蒔繪大手炉 鍍金火舎添ウ

濃茶席 小間

掛物 伝藤原行成筆 久松切 歳暮

久松家伝来

ゆく年の惜しくもあるかなますかゞみ
みるかげさへにくれぬとおもへば

表具

一風 上代紗

中廻 茶地緞子

花入 織部葦の絵

釜 道仁作 重餅釜

炉 縁

久以作 時代沢栗

水 指

古瀬戸一重口耳付

茶 入

利休好 中棗 盛阿弥作 覚々斎箱

仕覆 利休漢東

茶 碗

道入作 銘オダマキ

三井家伝来

出 袱 紗

福寿紋紹巴

九鬼家伝来

茶杓

宗和作 共筒

菓子器

吳須赤繪魁鉢

建水

南蛮内流 妙喜庵功叔箱

蓋置

唐物 七宝三ツ人形

短檠

織部油入皿添ウ

鴻池家伝来

続き薄茶

後炭香合

即全作 乾山写 馬

茶 器

大垣清遠作 無事蒔絵 瓢 共箱

茶 碗

黒織部杳形

替

真葛長造作 仁清写 ゆづり葉

干菓子器

唐物 花鳥文堆黒輪花盆

特別展示

重要文化財

与謝蕪村筆

紙本墨画淡彩鳶鴉図

双幅

雪月花に鳥図

三幅対

与謝蕪村・円山応挙・松村呉春筆

向付

道入作

割山椒

閑事庵宗信所持

鴻池家伝来

鼠志野四方

獅子丸金襴手

人形

加茂人形

猿まわし

三春人形 舞

奈良人形

猩々

稚子雛 一対

今回の展示について

近代数寄者に関する茶会記・高橋箒庵「東都茶会記」や野崎幻庵「茶会漫録」を繙いてみますと、社会的に多忙な財界人ですから、一日の業務を終えてのち、お茶を楽しむためには、仕事を早々に済ませ、まだ日のあるうちに席入りし、途中から灯火も必要となる時間帯に寄り合うことが多かったようです。

歳暮の冬の夜長を楽しむ「夜咄」の茶とは異なり、季節に關係なく行う「夕ざり」の茶であります。

今回の取り合わせ展示は、この辺りを想定し準備しましたが、ご来館の方々よりご希望の多い、与謝蕪村の代表作・重要文化財「鶯鴉図双幅」を特別展示しましたので触れておきましょう。

蕪村は、天明三年（一七八三）に六十八歳で亡くなりますが、そのわずか五年前から使った「謝寅」落款が捺された作品に代表作が集中しています。最晩年の作品がよいといわれる作家はこの蕪村と富岡鉄斎です。

その代表作の中にあってもこの作品は「俳諧は俗を用いて俗を離れることを尚ぶ」といつていた彼の俳諧精神を俳諧師として、あるいは画家として、鶯と鴉という市井に見られる卑近な鳥を用いて、俗のまゝで終らせず「離俗」すなわち俗を離れることに成功した作品といわれています。静と動を対比させた双幅の扱い方をはじめ、いろいろな角度から味わえる作品ですが、その点は皆様に委ねるとして、当時の蕪村は俳諧師を職としながらも、ともすれば画家としての名が知られ、そのことが残念で「吾こそは蕉風復興運動の旗頭『芭蕉に還れ』絵師よりも俳諧師なるぞ」と世の人々に訴えたかったのであらうと思います。

貸し出し展示の一番多い館藏品です。創設者北村はこの作品のため、この展示ケースの寸法を割り出し展示準備をいたしました。どうか、その念いも汲みながらごゆっくりとご鑑賞くださいませ。

北村美術館

京都市上京区河原町今出川南一筋目東入ル

TEL (075) 256-0637